

静岡県立大学短期大学部  
特別研究報告書（平成 15 年度）

## 静岡県のデイサービスセンターにおける

### 介護プログラムの現状と課題

山田 美津子      川島 貴美江      三富 道子

はじめに

平成 12 年に介護保険制度が導入され、丸 3 年が経過した。介護保険制度は発足前から賛否両論の激しい議論がありながらも、見切り発車的に導入された感がある。介護保険制度の導入により、介護の社会化など一定の評価を得つつ、一方では現在、介護を担う事業者や職員から、あるいは介護を受けている利用者やその家族、保険料を納付している一般国民からもこの制度についてさまざまな不満や意見が出されている。

介護保険は居宅サービスと施設サービスとに大きく分けられる。居宅サービスに分類されるデイサービスが在宅ケア推進の基幹的なサービスであることは言うまでもない。デイサービスは市町村の他のサービスの整備状況や実施主体である市町村の考え方やデイサービスを担うスタッフの職種や力量などによって、さまざまな形で運営されている。運営主体については、NPO や株式会社の参入が認められ、その数は急増状況にある。

街中でデイサービスの送迎バスや送迎車を見かけない日はない。小学生にデイサービスに対するイメージを尋ねると、「お年寄りがバスにのって出かけて、お風呂に入って、ご飯を食べて、遊んで、夕方帰ってくる」と答える。このイメージは、デイサービスの外見が多様であるのに対して、サービス内容が一律で十把一絡げの援助という今日のデイサービス事業の持つ問題を示唆していると思う。

静岡県においては、平成 15 年 12 月 31 日現在、397 箇所のデイサービスセンターが設置されている。デイサービスの目的は自立的生活の助長、社会的孤立感の解消、心身機能の維持・向上、家族の身体的精神的負担の軽減である。これらのサービスの利用者は、比較的似た条件を持つ人々の集団である。一人一人の足の大きさや形に合わせた活動プログラムなどや援助方法が用意されなければ、デイサービスの数は仮に充足したとしても、多くの利用者の満足を得ることは難しいのではないかと。先のデイサービスの目的に応えるための工夫努力をしなければ「一人一人のニーズに合った介護」という援助は不可能である。個別的な援助こそ専門的な援助であり、デイサービスはこれから個性豊かな団塊の世代が高齢期に入り、このサービスを利用しようとする際、一人一人のニーズに応えられるのであろうか。

## 1. 研究目的

介護保険制度導入後、利用者からの人気が集中した居宅介護サービスは通所サービスであった。

本研究は、静岡県内におけるデイサービスプログラムの状況をまず把握すること、デイサービスの職員がデイサービス事業の中で考えていること、困っていること、工夫していることなどを調査研究し、デイサービスのデイプログラムの現状と課題を明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究方法

アンケート調査の実施

### 1) 調査方法

郵送にて発送および回収した。調査に対する質問は随時電話で対応した。

### 2) 調査対象

静岡県内の397箇所のデイサービスセンターのうち、痴呆型と虚弱型のデイサービスを実施しているデイサービスセンター150箇所を無作為で抽出した。(痴呆型と虚弱型の双方のサービスを実施しているデイサービスセンターが26箇所ある。)

### 3) アンケート調査の名称

「デイサービスセンターにおける介護プログラムの現状と課題」

### 4) 調査の実施

2004年1月

### 5) 調査内容の概要

アンケート項目

#### <1> デイサービスについて

- (1) デイサービスの開始年月日および介護保険の通所介護事業所の指定の年月日
- (2) デイサービスの設置運営主体
- (3) 併設施設の有無
- (4) デイサービスの提供日
- (5) デイサービスの実施時間
- (6) デイサービスの延長時間の有無
- (7) 送迎の方法と送迎に要する時間
- (8) デイサービスの定員
- (9) デイサービスの利用者数
- (10) デイサービスの利用者の要介護度
- (11) デイサービス担当職員の人数と雇用形態
- (12) デイサービス担当職員の資格の有無と人数
- (13) デイサービス担当職員の年齢

#### <2> デイサービスプログラム（リハビリテーションおよびレクリエーションなど）について

- (1) プログラムの作成者
- (2) プログラム作成における利用者本人、または家族の希望の反映

- (3) 介護度の異なる利用者への配慮
- (4) プログラム作成上困っていること
- (5) プログラム作成における地域資源活用
- (6) プログラムへの評価の実施
- (7) プログラムに対する利用者の満足度
- (8) プログラム作成実施上、今後必要と考えていること
- (9) プログラムの特徴
- (10) 平成16年1月19日～24日まで1週間のデイサービスプログラムの実際
- (11) 自由記述

## 2. 調査結果の概要

総数176箇所に対して回収数103箇所であり、回収率は58.5%であった。

分析方法は調査項目すべてを項目ごとに単純集計した。以下、単純集計した結果の概要を述べる。

### <1> デイサービスについて

#### 一般型81箇所

デイサービスの開始年月日については、8割が平成になって開所されている。設置運営主体については、社会福祉法人が6割、その他NPO・営利法人・株式会社などが4割であった。併設施設の有無については、半数が特別養護老人ホームなどの施設に併設されている。サービス提供日については、平日提供が3割、土曜日まで提供しているデイサービスが5割、土日を含めて一週間すべて提供しているものが2割であった。祝日についてのサービス提供は6割が実施していた。1日の実施時間は、9時または9時半から15時半または16時までの間の6時間から7時間に集中している。利用者の希望に応じて時間を延長しているデイサービスセンターは半数であり、おおよそ19時までの3時間延長していた。

定員についてであるが、10～20人定員が約5割、30人定員が4割、40人定員が1割であった。

利用者の要介護度については、要支援が695人、要介護度1が2266人、要介護度2が1453人、要介護度3が1027人、要介護度4が620人、要介護度5が283人であった。(利用者の延べ人数)

デイサービスに従事する担当職員については、専任職員の904人のうち(併設施設との兼任は62人)常勤、非常勤の割合は半々であった。

職員の資格については18種類と多種多様であるが、介護福祉士、社会福祉士、看護師、ヘルパー(2級)が圧倒的に多い。

#### 痴呆型22箇所

痴呆型のデイサービスの開始年月日については1箇所のみが昭和に開所されている。残りの21箇所すべてが平成に開設された。設置運営主体については、社会福祉法人が8割、その他NPO・営利法人・株式会社などが2割であった。併設施設の有無については、有が8割を占める。サービス提供日については、平日提供が5割、土曜日まで提供しているデイサービスが4割、土日を含めて一週間すべて提供しているものが1割であった。祝日についてのサービス提供は5割が実施していた。1日の実施時間は、一般型とほぼ同じであ

る。利用者の希望に応じた時間延長についても、一般型とほぼ同じである。

定員についてであるが、10人定員のデイサービスセンターが7割を占めた。

利用者の要介護度については、要支援が4人、要介護度1が93人、要介護度2が123人、要介護度3が157人、要介護度4が150人、要介護度5が131人であった。  
(利用者の延べ人数)

デイサービスに従事する担当職員については専任職員が133人のうち(併設施設との兼任は22人)常勤が6割、非常勤が4割であった。

職員の資格については、一般型と同様、介護福祉士、社会福祉士、看護師、ヘルパー(2級)が上位を占めた資格であった。

<2>デイサービスプログラム(リハビリテーションおよびレクリエーションなど)について

#### 一般型81箇所

プログラム作成にあたり、利用者本人または家族の希望を考慮しているデイサービスセンターは8割、また要介護度に対する配慮も8割を占めている。マンネリになることを防ぎつつ、一人一人のニーズや障害に合ったデイサービスプログラムを企画しようとしているデイサービスセンターのプログラム作成に対する工夫が見られている。

一方で作成にあたり、困っていることや活用できる社会資源、あるいは今後必要とされる課題について指摘がなされている。プログラム作成に困っていると答えた施設が7割、今後必要と思うことについて9割の施設が以下のようなことを提起している。スタッフの増員、施設設備の充実、予算面への配慮、地域資源の開発、ボランティアの充実などであり、またスタッフ自身の力量を高める必要があると答えた施設が7割におよぶ。

自分の所属するデイサービスセンターのプログラムに特徴があり、または特に力を注いでいるプログラムについて8割のデイサービスセンターが自信を持っている。

週間プログラムについては、まさにさまざまな内容の記述が見られ、利用者の方のニーズにいかにか添い、利用者が「楽しかった」「また来たい」と思うデイサービスを提供できるよう工夫している。回答のあったデイサービスセンターの中で、これほど多く設置された各デイサービスセンターがどんなプログラムを実施しているのか、情報交換の場を求める声が多数あった。

#### 痴呆型22箇所

痴呆型のデイサービスセンターのプログラムについて尋ねたアンケートでは、ほとんどのデイサービスセンターが、利用者本人や家族の希望を考慮したり、要介護度の違いへの配慮をしている。

プログラム作成にあたり、地域の資源を活用しているデイサービスセンターが7割、活用していないが3割であった。9割のデイサービスセンターがプログラム実施後評価を行っている。プログラムの作成・実施にあたり今後必要と思うことについて、スタッフの力量、スタッフの増員、専門家の導入、ボランティアの受け入れ、社会資源の開発、予算面の充実が挙げられている。

自らのデイサービスセンターのプログラムの特徴について、痴呆型デイサービスセンターの場合は利用者一人一人の状態、体調、能力などを把握し、より個別対応を心がけると

いう工夫が見られている。グループ活動のプログラムがよいのか、表現が困難であっても職員から見て、利用者の状態に見合ったデイサービスプログラムを進めていくような、細やかな配慮が見られる。しかし、男性利用者へのプログラムの工夫、メニューの選択肢の狭さ、個別対応が密になればなるほど職員の人数の限界、施設規模の問題などの課題に対する意見も多々ある。痴呆の方々に効果的なプログラムとは何か、痴呆の進行によって重度化に伴うデイサービスプログラムの研究、職員の研修の必要性を求める声が強く聞かれる。

おわりに

アンケートの実施時期は1月という寒さの厳しい時期であり、一週間のデイサービスプログラムは季節的な特徴があり、室内の活動が多かった。プログラムの名称や分類はデイサービスセンターによって統一されておらず、まちまちであった。その内容も個別になされたものか、集団でなされたものか、把握することができなかった。

しかし、デイサービスプログラムは、いずれにしても個別プログラムであったり、集団プログラムであったりする。そしてデイサービスにおけるすべてのプログラムは利用者一人一人の心身状況などに応じた個別性豊かな援助を目指すことを念頭に提供されなければならない。そのためには、利用者のニーズを明確化した上で、適切なアセスメントを行い、個別援助計画が作成されるべきである。その上で、個別援助計画に従ってすべてのプログラムが実践されるべきである。デイサービスプログラムのあり方を検討するためには、利用者への理解とアセスメントの実施が欠かせない。アンケートにおいては、どのようなプログラムが現実に展開されているかということに主として調査の重点がおかれている。その意味では利用者一人一人の方々と直接関わっておられる、ご協力いただいたデイサービスセンターの職員の方々の実践の一助となるよう、この研究を継続していく必要があると考えている。

(平成16年3月22日受理)